

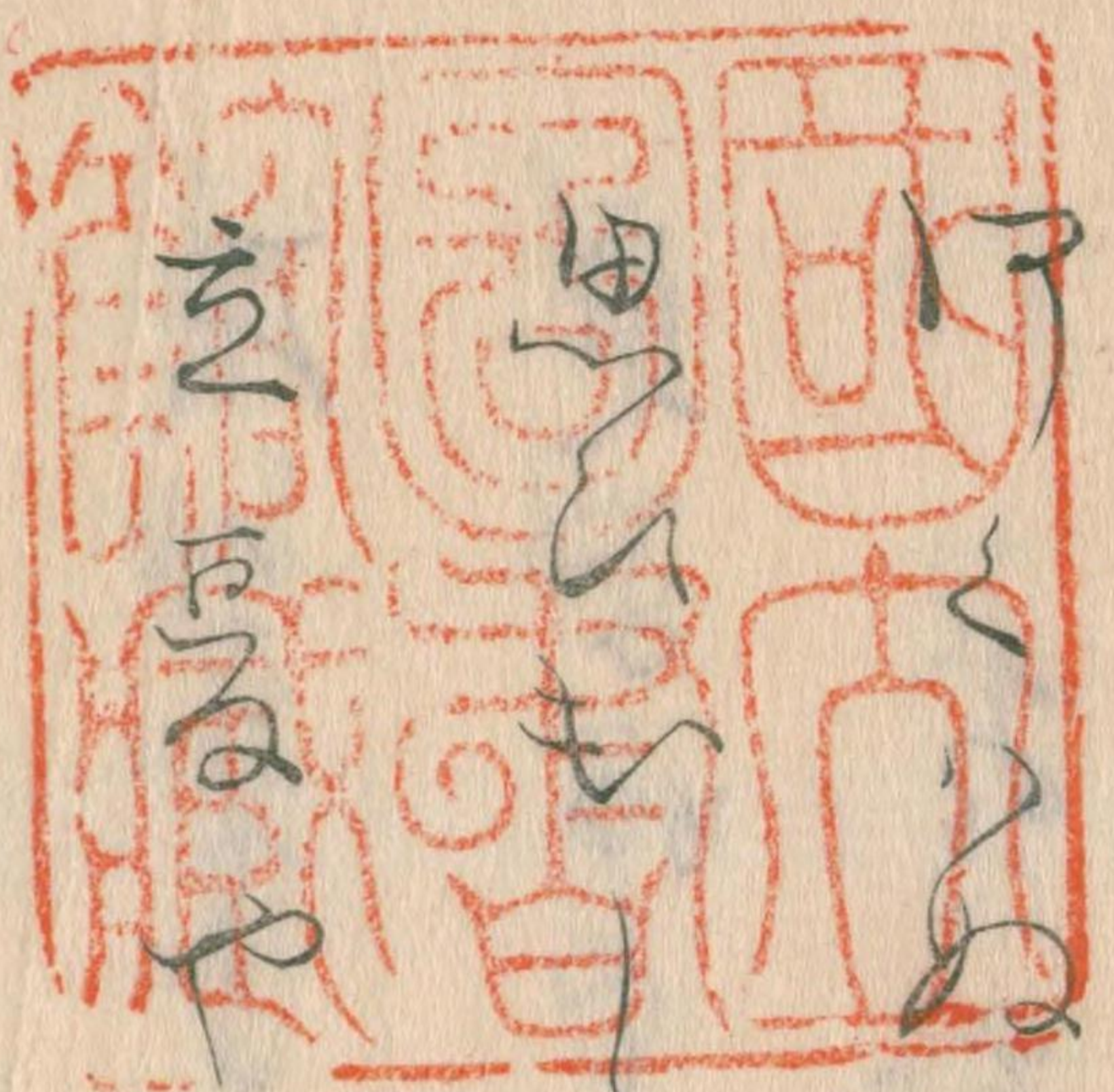




863-118

仇浩之待集下集

夏之部



魚や往來此文衣星谷

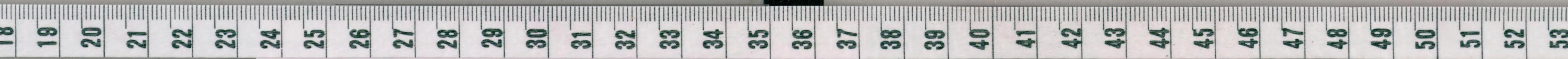
く改中とさう文衣

さるやさる花えり月かきまら松隣

家の境より年月を委よて

手拭やさし物なり夜うへ大柄

線脱や薄淡かまの紙通し米沢宇喬





毛加木よて板の白きうぬ更衣久臈

權佛

提戸て柳引きや佛生舎古翠

居なうの流える庭や仏と云越後石印

見よかよつてあけりや茶の巻多よ丸

おむ

杜若

卯茶々咲拵てれ名なるやう久臈

うね花や月よゆきまはるぬ巻兼折香中

待巻て笑々やうきつ為度茶月

朝雨よ豆磨あう下弦杜若 照肩

往來の候よなう下弦葉馬

馬好子の鼻もさかぬかきつ越後之徳

うね笑てくくく南初卓巻

二人して傘一本や杜若岩峰夕山

事一

甲一あやふくまかきつ孤う一き 碓嶺



迷わくな痛おろけー女む等笠  
多たひれておて山形さくさく  
二三日るをぬしうきーお茶ー蒸  
乙るのまぬ家と影ーすーのも 涼谷  
おーは言や非まれ小湯下総桂丸

牡丹筆

供 蜀のさよあしははらんま仙臺 江三  
正 妻おあうまほめる牡丹哉 太橋

筆や掃付ておく妻の糠岩城 芦帆  
牛お子や佐膳をぬき寺お若 湖中

木下園

志あつ

行違ふ像え道や木下下総 蒼喙  
見すまへて酒汁おろし哉又 半侶  
痛めつゝ人のせめてあゝ茂りかな 湖中  
半ちよなうて半燈志あつ岩城 藤世

桐を

桐を



ゆ 寺をのこして色ぬ桐のむすし  
まよふ文の後まの上や桐の花  
一八や志賀れ古る人そつ久臧  
る規

本戸さして境内ちんとはまき  
掌のつゆ野もつゆまはま  
時多もや伽藍の一人客左邊 蘇海  
寄送る残燭短しほらま

さうよ二階竹若やほらま寸江戸 太珉  
池奥れ災ふの一年

之ふ戸もなきてゆ山の郭么 礎嶺  
石地花首ら花はらま来折 乙人  
一つみ新葉のめなま川又 然葉  
あは舟とさへ花越もや 大林  
閑子鳥のりこ子  
後正れ金うたひつてふ子を 古葉





昨日より酒うましなふ子も米は友之

あうら小小きるう用子鳥雀雀

麦糠の煙る提下り子まま

洞海舎をまじり

ひきてかゝる点字笑ひそちり子一具

よ一切やさあいう一横後一木旗

志尊 水鶴

うきいすや一侍ゆて志を吸米は貝谷

志て後尊梅をいくえを三平

ゆらぬれ水鶴まとつく松子いは阿子

松真

株なまり引さきしゆかつを麦右

和松真同屋好仕切えせまり一株陽

足場まりあかまりまり松真いは福字桂裡

端午

朝のきく消る残骸古翠







明きし五月さしる宵に大木

春こころ晴るるに

水見音米は思ふ

はるあま

昨日歌や麦の秋ふなつりき

山伏の墓をふりて麦の中泳返

清水

一本の柳をよしら清水哉方は種柳

舟毎に藤をひき清水哉草池

松手に花をひき清水に福米

結実此の末に付きし清水福米萍沙

其角うたのうや清水をてとたらし  
夕をせしめて

朱鷺のや清水よ下て苔れむ茶肆い

棹し静し

ゆすつてと起ぬ菴主の掬の音江之

山寺や川ぬ榎の榎れ米ふ有橋



何れもみらふありしよきし  
静の毎消て志しく松の茶  
桂丸  
静とみと煙まふてわする  
雲花

蓮苔む

無んしてちらてわらぬ蓮の毛  
松橋  
心の封ときくして活きうまの茶  
古衆  
足代と蓮の中なり  
角樽一具  
流匠一を根の上りて苔の毛  
九睦

後冷きま居の鶏や苔む  
南月

暑  
夕之

蓮生やぬら暑もかきあり  
鬼平  
夕之み長くはるや一田つ  
素花  
夕之やニ夕反歩え一日れ  
最上  
梅周  
云用入て柱も星れ  
米沢  
正令  
隣り考つてその露ふ土用哉  
岩梅  
汀花

納涼



やれ〜とすむるれき土用れ 不現

糠星を流く〜と涼〜角田川 大梅

いと横をす〜と甘〜めき 穂<sup>老境</sup> 古雀

夏 籬

蝉と一ふ子楠の葉をうな 古川

吾振ふ吾花葉を〜とまう 夏より

牛植る日よ休〜とあうや 穂<sup>い戸</sup> 附堂

夕良のむかひにるれは〜とま 太橋

川粒の目を〜と〜たる二階<sup>越</sup> 又舟

よと〜と〜と〜と〜と 怒<sup>老境</sup>う思文

翡翠の座を〜と〜と〜と 咲<sup>果</sup>花

浮葉を〜と〜と〜と 女<sup>水</sup>を青里

火取虫斗〜と〜と〜と 新<sup>い戸</sup>子轆

親麻の越へ川越す麻子<sup>い</sup> 免々

小娘の姿を〜と〜と〜と 蟻兄

茶の戸や故を〜と〜と〜と 経机<sup>老境</sup> 思水



惟子や佳よえせてもき帝冠者大段其流

壺大段けうしんかわくや夏ぬ織大段湖平

乳大段のきりりして通る千田字を一具

湯大段のきるきりしつらり果れ茶大段然菜

蟬大段写や桃の遠入一日南水大段青斗

俳諧立待集

冬之部

の算の詩の心はく弦をれ  
サシるるるれハ

徐大段ろう雲色う射白う上の村久臧

赫大段てきけい草木を極る射あま護物

黒大段はこやし交射白一麦れ毛太紙

川大段は流てちしきるきくれな大段東止

少大段ぬれいしきよ甘白のましく大段藍大段お

下





畑中よるる花をこれに二本松人

村のやうなうの伯う仁井町一之

馬洗ふ湯草お上り村西より年

戸の窓を射るまゝやと聞きゆく茶静

風

落葉

本枯や手ぬえけの梨の意大枝

本枯やうけよけの母お例かつ

風よりおとちりきり歩鹿流古川

本枯や鷲々鳴きもぬやうの一具

まふのまけふすゝ人の花葉搔沙鳴

侍子ホして味しすある花本葉福吉一葉

花をせし上へ又降本のなす哉下総東洋

きれ草の命をたきおちをん越後了

茶花 水仙

茶のむね咲抜ひきり夕念佛ハ重光

茶の意や折し雨よはく春林曹



水仙やぬり日おさる花の間 性寂  
有 仙のふれ葉のまも心 旭下な 圭介  
海花 枯尾流

うそてないきしよ打や 帰花 太橋  
あ果のやうききき 海花 雪笠  
真山や花と並ふうらさな 木紫  
旅の目け結るまや 枯尾流 子崖  
枯尾流 常陸へきれる水の音 桂丸

極拍

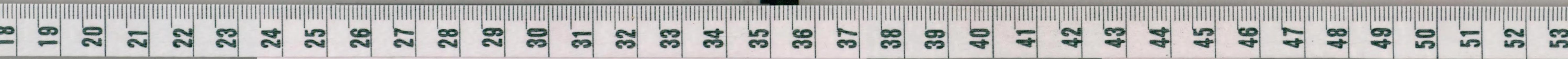
うーろーと白うらてえうら冬の梅 上野 麻方  
手梅や雪の匝屋 菱尻あそせ い 淇水  
枇杷咲や猫着まつさー二石も斗 水 祝介  
山茶をき押曲てま本るまな 方居  
芙蓉の白ふ隣や 石落赤 涼谷  
麦蒔やすしぬ形 竹頬あうら 栢樹  
葉の糸の風をまきりて 枯よりう 碓嶺



枯草ようしきすすい川い 碩富  
冬櫃一ツをぬかす所 洪水  
隣々ゆるえきや 葱畑 沼田  
大根引  
最柳の上より干たる大根引 半丈  
山陰に赤き草一丈 大根引 竹茎  
畑のゆる依寺へ 大根引 太青  
大根引 志賀の人まを枯い 蒼丸

子鳥 鴨をいふ

子供呼女のあや川ちとど方陸 南化  
鴨子鳥すきうの敷となめう 史子  
板すうやおれ一門原をうき 一具  
野飛てはおかよふき 葵月  
村邊の役提灯や鴨のこゝろ 栗産  
葉のくれえきやを一の浮示 一肖  
並〜よ釣し〜いぬ 媛も 学ひ





お練す門へ控まう者丸乃陸け不舟  
 志か〜海子と争病心乃陸を丸幸、只界  
 吾理よりを明て活〜無女者水戸泉屋  
 者の葉抜て休〜者徐全  
 鹿馬〜さん〜岨の者川又幻案  
 零垣や余はよ本〜庭の梅宇高  
 を安〜傘の〜おてはん乃陸菜山

向よおて重よ明〜陽裏支、昭肩  
 はつ者や松の付〜信奉ハまめ

根岸の葉葉すよ一の類あり

和をの娘〜木寂と〜も子か子一蕙  
 零妙人見よめて茶を〜〜長成  
 引意のあ〜ぬさわかや重の朝惟寂  
 竹切て西月もなや重乃陸此為十中

江山不夜月子里天地無私玉の家



世よすむらさきまき志のくさるる人

茅葺や念あらうぬきはうす大梅  
里杖持のあさめ目や重えぬ白塘  
ちかあつて御名おもう生すぬき松

七お

志和しんよおれ是ささめ越後  
萩村

稗書を焚や卯未のお日私古叟  
おあやうぬ首ちり山崎き登芦帆

同うきくれぬおよおの声謝堂

寒炭

如る昇の蒸の芽はうのきくれ越後  
東塚

お月サのむなまら魚

梅の本とまゝ一月おきかま何亭  
行き地よ来てそ炭を折ち伊予  
昌作  
お女本や僅よ焚きて炭の中吟水  
下松

櫛

火燈 火桶



我門を牛とちぶく櫓如り南石

馬如粥引くまぐぬる櫓大乳漢物

漂泊のせいのやうに宝火燧然象

海如香火燧てやういせふなり麦首

大山うぬきて来てと巨燧哉一瓢

まゝと燧る一控り火桶乃陸飛毛

鯨 生海氣

鯨 煮やいのまゝとまゝとまゝと来て子貉

朝日如さーけいけい一鯨汁凍谷

鯨汁の懺悔とすゝや納豆汁玄燧

呉けると生海氣すへるう笑い声武蔵候高

一志如くあまゝとけいけい生海氣来る乃陸由之

貞見世

貞見せや隠居う死て小沸ーき、牡丹

顔見せや朝よ赤木く夕うな英雅

冬籠



大津の瓢の口や冬六も<sup>越</sup>五<sup>越</sup>吹

我口と戸を立られす冬<sup>龍</sup>母<sup>母</sup>野<sup>母</sup>揚

冬月

松と見ゆるや冬<sup>る</sup>月<sup>る</sup>素<sup>る</sup>心

町内は森はさき少冬の月<sup>う</sup>う<sup>う</sup>鳥

寒念佛

いさかしの中<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>ま</sup>念佛<sup>ま</sup>史<sup>ま</sup>子

能<sup>ま</sup>女<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>少<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>ま</sup>念佛<sup>ま</sup>半<sup>ま</sup>丈

餅換

おもしろさばしめ<sup>餅</sup>の<sup>餅</sup>言<sup>餅</sup>多<sup>餅</sup>あ

餅換は信持を<sup>餅</sup>ね<sup>餅</sup>く<sup>餅</sup>田<sup>餅</sup>言<sup>餅</sup>哉<sup>餅</sup>栗<sup>餅</sup>庵

栗

中<sup>餅</sup>を<sup>餅</sup>え<sup>餅</sup>て<sup>餅</sup>も<sup>餅</sup>ま<sup>餅</sup>う<sup>餅</sup>年<sup>餅</sup>の<sup>餅</sup>市<sup>餅</sup>体<sup>餅</sup>年

年<sup>餅</sup>は<sup>餅</sup>市<sup>餅</sup>人<sup>餅</sup>の<sup>餅</sup>買<sup>餅</sup>もの<sup>餅</sup>を<sup>餅</sup>ま<sup>餅</sup>ん<sup>餅</sup>ま<sup>餅</sup>す<sup>餅</sup>竹<sup>餅</sup>花

見て<sup>餅</sup>ま<sup>餅</sup>の<sup>餅</sup>年<sup>餅</sup>は<sup>餅</sup>用<sup>餅</sup>ま<sup>餅</sup>ふ<sup>餅</sup>二<sup>餅</sup>の<sup>餅</sup>山<sup>餅</sup>古<sup>餅</sup>川

母<sup>餅</sup>は<sup>餅</sup>よ<sup>餅</sup>て<sup>餅</sup>も<sup>餅</sup>来<sup>餅</sup>の<sup>餅</sup>法<sup>餅</sup>中<sup>餅</sup>や<sup>餅</sup>年<sup>餅</sup>月<sup>餅</sup>ま<sup>餅</sup>斗<sup>餅</sup>造

下





年々まき立しとらんえて桂 南山厚

破 廣らういゝ梅一枝

りやーやめてたき家此きし物 大梅

冬 種

妻ら家う半盤おもひの御講一具

十取〜 活をさやう在交 名陸 玉 紫

職人の船起し〜 舟 逆、沙 良

口〜 飯粒つきて 網代 近 下

み〜 竹芦よあし〜 てきめ入 泳 ぬ

る 医者の子 走火を焚 枯 舟 昭 眉

着こて 行かくき 舟 舟 大 梅

小甚 燈や茶の湯 老ら〜 舟 舟 履 名陸 堤 不

さ〜 舟 舟 やる 舟 舟 舟 舟 湖 翠

然ても 居ぬや 衣をか〜 舟 舟 李 大

位て 來る 見れし 舟 舟 舟 夕 山



まゝの葉もさら葉をもくわへ下 素花  
東風よ虫の音の酒をばらけて 大枝  
いつてもまのほの板舟子 谷  
とみよも葉よ門あつり 花  
徳さし返して下りる女川 梅

静なるよ大枝一箇やいと 様 涼谷

まゝの葉もさら葉をもくわへ下 素花  
東風よ虫の音の酒をばらけて 大枝  
いつてもまのほの板舟子 谷  
とみよも葉よ門あつり 花  
徳さし返して下りる女川 梅

静なるよ大枝一箇やいと 様 涼谷





稀人を魅の築城の連なり谷  
ぬるまよとくきぬ尾如怪貪  
笠脱て整束しし辛の種さ  
有馬て買んおちして見る  
と休くた如月くもをれき用を  
透る家母れある板の菱  
啼合す禁の町方二隻鶏  
さくく〜と禮忌ふさる  
花

猫舌よ生れ付し周果者  
湯屋れきしんか給まのら  
急の枝頭きれし米惑休  
ついで目もときふさふもれ  
祐天女葎方春めしつう休よ  
霞かとかも軒うき出寸  
虫はよま〜し〜めめ〜ち  
何や〜ま〜入〜小築司  
谷

ナナ





結梅を流を忌む結臺  
買れ魚を食ふしてわろ  
に側を寺と森の中へ交り  
身を一人坐してわろ  
とくまゝ起ても飯を交ひ  
煙草のむしをいりて中  
水あう忌ぬの湯の舟中  
厄日おまの梅よめもきい  
梅 六 谷 梅 六 谷 梅 六

寺お釜かゝるもわろ味増を梅  
志のいありのなゝめ 疾 咳 六  
量寫へ又擲えを走らせふ 梅  
油草をうきくさる 梅 谷  
花の伝も切流れもいさて 六  
人もさ口へさる 梅 六

凍谷 十二句



素木 十二句

大梅 十二句

娘よ来きし水鷄困る子多 大梅  
 門口ぬふ苗時の雨一具  
 茶代よと小さかまきて海らん 漁谷  
 頼まれよめて 行 岸ふさかす 梅  
 お宿よ舟をすえら 宵此月 具  
 角力をとてと ち来ぬを 癖 谷





行秋を支配店に惣格子梅  
河もさぬ医者此是子具  
流きて衣御の小社皆流る谷  
行れぬ中を傳きしは法梅  
馴る酒章此をれる勤向具  
川為あては借鏡法すふ谷  
蓬とよ源とくと月う木一梅  
凡ひいて出ま講親の申具

前髪の前まき喜記名主殿谷  
と交の列率此上事尊梅  
急よ澄一郎此とく際立て具  
鯛もくえんふれと事平る小松菜谷  
前庄へ甚れ無んを待も一梅  
年よ似あしぬ妻せんさく具  
地やうとやうし者よ争かりて谷  
流しの中よ梅は守梅



おあ〜田女喜〜此残 櫛 具  
振屋拵よて為ふ〜浮 谷  
分お女底を叩く本真 諱 梅  
疵瘰癧の法いてあ〜けふ 具  
叔の文て土埴極きいも 序 下 谷  
月女仕組のみお〜古拵つく 梅  
赤落子子穉も附を見積て 具  
毛いカてお〜金か〜 谷

毛纏成担板不〜後法めふ 梅  
回向の併てゆ〜な口く休 具  
街さよ盲つ子〜口強き 谷  
老鳥おすま〜在義也此 梅  
餅もれい〜な〜 甚 不 具  
ち〜ちと梅お 拵 切 湯 谷

大梅 十二句



一具 十二勺

涼谷 十二勺

糊 如干ぬり燻もろきかき  
 家 灰と成てしれきく取涼谷  
 煎きし張る人越して一具  
 家鴨を味しの手傳をす  
 夕飯のつとて一具の茶  
 立すきある菓種をけふ具

煮茶



心越てあまききよまむりきき  
 小きいさつしきききききき  
 髪結ふと虫歯よつれてむつき  
 鼠落しと升て塩入 結買ふ  
 此既水も焼けしきききき  
 本槿よ換をはき分てかく  
 松茸もまきと熱菜よ茶 魚  
 月見をかせしきききききき

刺之水切まじきききをねめ  
 此と流々ふりきききき  
 惣込て板障のしきききき  
 奈水口とゆと拍托のほろあ  
 蕨入の居ぬ家よまききき  
 義理そしきききききき  
 俵かきききき子能肥えて  
 粉待水了しきききききき



涼しき苗字のすまゝなるの世の谷  
目利を鼻よわけてはきく具  
月堂の店賃高よしの宿の谷  
歩きのきれ悪のま入の谷  
厄除の札をぬき水海の具  
志ほくく茶のむらさきの谷  
股の伸もみ給れいゝあゝの谷  
筆おもしろい俄の神の具

泥の手で茶のまじりたる田植の谷  
穀のあてゑ口をさく谷  
土を踏みぬくそのあゝの下の具  
伊勢の下の向のえんゝ風船の谷  
様をぬききりすゝまゝの谷  
甚だ弱の草のむらさきの具

素心十一句



涼谷十二

一具十二

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 涼谷, 一具, and 十二.

道はたつばらち谷はらぬかよぬ  
殊は名もなまらぬとてぬ  
まよふもなまらぬとてぬ  
人の涙はのりあははあてし  
よめくもなまらぬとてぬ  
椿丘屋士の仇讐をよみてけ  
つらなれは  
白根よいそみなぬ  
武の市申子

透









863  
2  
118

14213

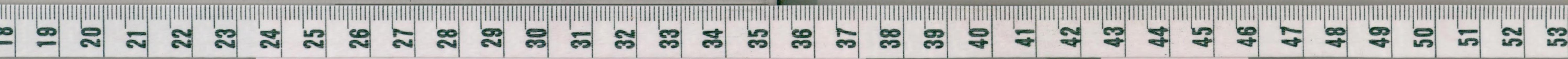
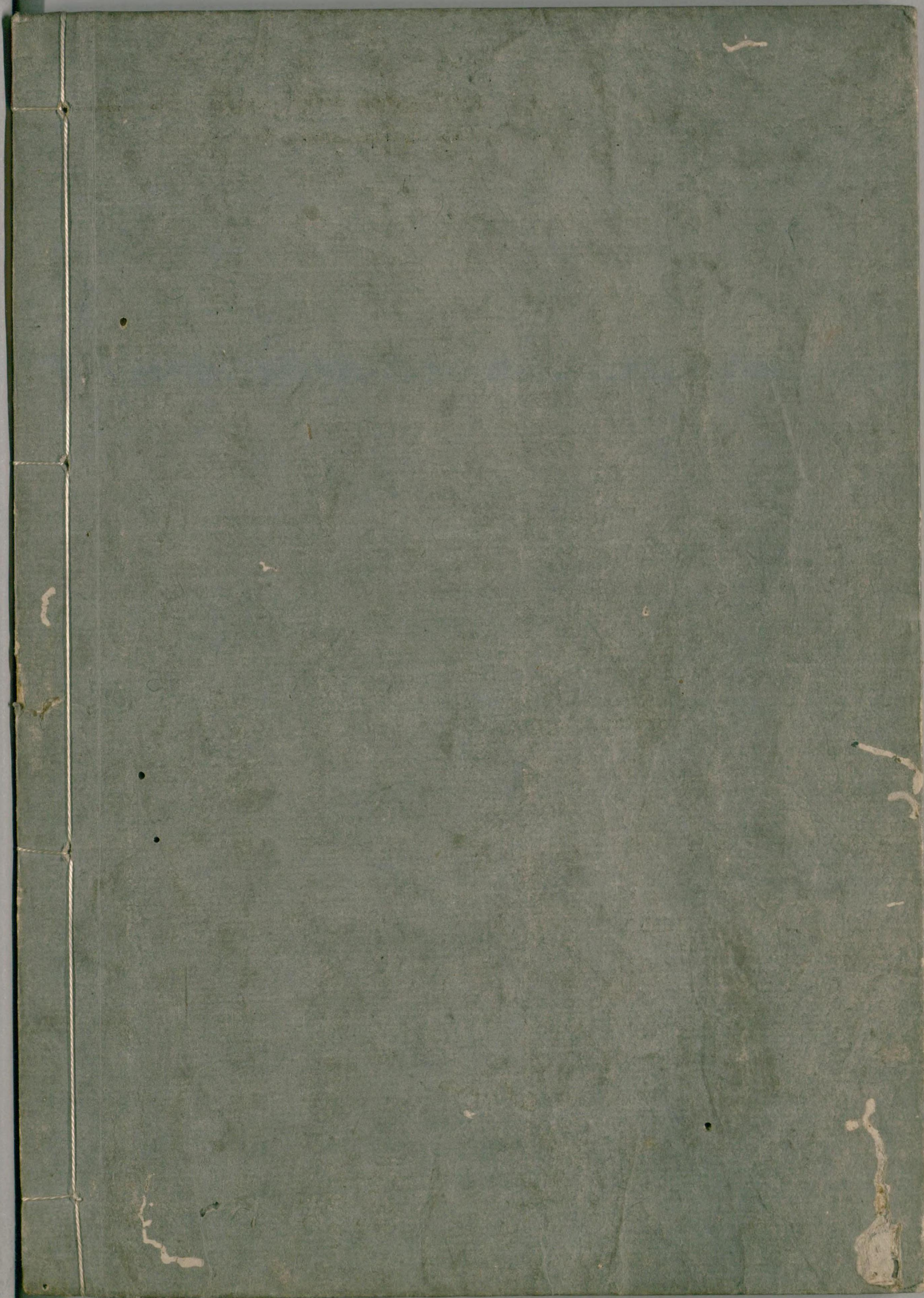
Handwritten text in a cursive script, likely a list or index. The text is faint and difficult to decipher, but appears to be organized into several lines or columns. Some characters resemble Latin or Greek letters, possibly used as a shorthand or code.

表  
附  
録

118







国立国会図書館 タイトル『俳諧立待集 2巻』 請求記号 863-118

ガラス使用